薔薇の香り

７月、わが家の庭にイングリッシュローズやフレンチローズを中心に、百種類以上の［薔薇］が咲き乱れている。

北海道一豪雪地帯と呼ばれているこの地は、昨年その名をさらに高める冬となってしまい、予想外の雪の重みで、多くの木々が被害にあったが、そのような環境の中で、わが家の［薔薇］は、今年も、美しい姿と芳醇な香りを演出してくれている。

この時期、当院の来院者は、この［薔薇］を楽しみにしてくれているようだ。

患者さんいわく、「玄関を入ると、院内に漂う薔薇の香り。カップ咲きの丸みを帯びた薔薇のディスプレイが、心を癒やしてくれる」。われわれ医療人は、当然のごとく、その病を治療するための知識を最大限に提供することが使命であるが、それ以前に、今、目の前にいる患者さんにどれほどの心配りができるのか？が問われているように思う。

患者さんが、医療現場に求めているものは、非常に多様化していることは確かである。医師をはじめ、医療スタッフは、お一人お一人の患者さんの病状と心情を的確に受け止め、より良い医療提供に全力を尽くし、最終的に、患者さんが心身共に健康になっていただくことを目指さなければならないだろう。そのハードルは、大変高いものである。われわれ医師をはじめ、医療スタッフの意識を変革させるのには、多くの時間が必要と言える。

先日も、ある患者さんから、私の健康を気遣う言葉をもらった。病を持って来院された患者さんから、逆に、優しさをいただいたのだ。その気持ちに応えられるよう、スタッフと共に日々粉骨砕身することの必要性を、改めて感じている。

今朝も、［薔薇］の手入れに、励むといたしましょうか…。　（K）

新型うつ病の時代

週刊誌を中心としたメディアに新型うつ病の名前が出ない日はない。Googleで新型うつ病を検索すると160万以上ヒットする。

従来型と新型の診断基準の違い、治療方法、新型うつ病を見分ける適性検査、新型うつ病にかかった本人の治療方法と克服方法、新型うつ病に対しての会社の労務対策、労災を通る方法、果てには障害年金２級を獲得して気持ちを楽にしましょうと書かれているハウツウ物など、実にさまざまなことが載っている。まさにブームである。

確かにうつ病の患者数の増加はすさまじい。しかし、従来型と言われるうつ病は多くはないのが実感である。大部分は新型うつ病である。新型うつ病は何者であるのか。一言で言えば、これまで言われていたうつ病とはあまりにも臨床症状がかけ離れているために、付けられたうつ状態の総称である。ただし専門用語ではない。たとえば上司から注意されると、切っ掛けに調子が悪いと言い、医者に診断書を要求し、会社には行きたくないが、家にじっとしているわけでもなく、友達と旅行に行ったりする。悪いのは自分でなく、会社や上司であると非難し、果ては自分の言う通りにしないと、どうなるか判らないと家族を脅す。会社にとっては扱いに悩むところであろう。新型うつ病はなぜ増加したのであろうか。これにはさまざまな要因があると言われている。たとえば操作的診断基準の導入で誰でも容易にうつ病と診断できる。さらに現代人が持つ、自分が傷つくことに我慢できずに、他人のせいにする傾向などが挙げられる。

今後も増加するであろう新型うつ病に対して、医療ができる部分と自分が努力する部分があることをもう一度考え直す必要性があると思われる。　（J）